

大通公園を望む窓辺から

夏山を歩く

常任理事 櫻井 晃洋

生まれ故郷の新潟県で卒業した県立高校には修学旅行がなく、毎年夏休み前に好きなコースを選んで山に行く「全校登山」という奇特的な伝統があった（今も続いている）。そのせいかどうか、卒業二年目に信州大学に移ったところから、少しずつ夏山を歩くようになった（冬山には行かない。ゲレンデだけで十分）。学生時代を過ごした新潟は目の前が海だったのでヨット部に入り、週末はいつも海の上で練習していたが、松本では目の前は北アルプスの山並みなので、歩かないという選択肢はあまりない。街からよく見える常念岳の肩には常念小屋という山小屋があり、その脇に信州大学医学部の夏山診療所があって医療ボランティアを募集するので、ほぼ毎年参加していた。この時に、お酒をあまり飲まない健脚の看護師さんを誘うのが重要である。登山客が応急処置を求めて訪ねてきても彼女が全部対応してくれるので、こっちは安心して昼間から山小屋のデッキで生ビールが飲める。常念小屋から縦走したり、別の機会に山に入ったりして、奥穂高や槍、白馬三山など、北アルプスの山々はずいぶんと歩いた。

さて、北海道に来てから2年あまりが過ぎたが、なかなか山歩きの機会に恵まれない。ニセコアンヌプリとイワオヌプリ、樽前山と風不死岳、それと羊蹄山は休日に早起きして登った。どれも日帰りで行けるし、行程が短いので少々物足りないが、北海道ならではの山頂の眺めはどこも気持ちよい。残念なことに、去年は利尻山に登ろうと休暇もとったのだが、折悪しく大雨でとても登れる状況ではなく、結局大揺れの飛行機に乗ってウニとラーメンを食べに行ったようなものだった。今年の夏にはリベンジしようと思っているが、果たしてお天道さまは微笑んでくれるだろうか。太陽出る、罷出るな。日々の行いがこんなところで査定される。



「だんじり祭」見聞記

前監事 水元 修治

地車(だんじり)が町の辻を豪快に駆け抜ける「だんじり祭」はテレビで放映される光景をたびたび見ていたが、今回、昨年9月に念願の岸和田「だんじり祭」を体験するチャンスに恵まれた。

会社を定年退職し、10年ほど前から故郷の岸和田に戻っている古くからの友人にK氏がいる。K氏とは以前は北海道がオフシーズンの2～3月に関西近隣のゴルフ場でプレーを楽しんでいたが、寄る年波に勝てず、彼はラウンドすることが難しくなった。そこで今回は「だんじり祭」の見物をするようになった。

以前は宵宮が9月14日、本宮が9月15日として行われていたが、平日に当たると町内の曳手が不足して曳行に支障をきたすことや観客の数が減少するなどの理由により、ハッピーマンデー制度の導入後は「敬老の日」が第3月曜日と定められたのを機に、「敬老の日」の直前の土・日に日程が定められた。

今では岸和田市を挙げての一大イベントとして、2日間の観光客数は岸和田市の人口(約20万人)の2倍以上に膨れ上がり、市内の道路は至る所で通行止めとなりタクシーの乗り入れも規制される。

「やりまわし」は笛や太鼓のお囃子によって、狭い路地を直角に猛スピードで地車(だんじり)が回るため、しばしば怪我人がでることで有名で、一番の見せ場となっている。

「やりまわし」の一番の名所は岸和田市役所前から右に直角に曲がり岸和田城に向かうところである。こなから坂(小半坂、90°の1/4勾配=22.5°)というややきつい坂を上り、一息入れて一気にやってくる“だんじり”を数台見物し、近くの“だんじり会館”に向かった。

前夜の宵宮では、たくさんの提灯を下げた“だんじり”の「灯入れ曳行」は賑々しくそして優雅ではある。

昼の勇壮・豪快な「やりまわし」とは一味違う風情があった。